平成22年11月1日発行（毎月1回発行）　ＩＳＳＮ　１３４３－６０７４

平成二十二年十一月一日発行（毎月一回一日発行）五一五号（第四十四巻十一号）
第515号

東京とクジラ

日本鯨類研究所
顧問　大　隅　清　治

第515号
（第44巻　第11号）

編集
発行　財団法人　東京水産振興会

「水産振興」発刊の趣旨

日本漁業は、沿岸、沖合、そして遠洋の漁業といわれるが、われわれは、それぞれが調和のとれた振興があることを期待しておるので、その為には、それぞれの個別的分析、乃至振興施策の必要性を、痛感するものである。坊間には、あまりにもそれぞれを代表する、いわゆる利益代表的見解が横行しすぎる嫌いがあるのである。われわれは、わが国民経済のなかにおける日本漁業を、近代産業として、より発展振興させることが要請されていると信ずるものである。

ここに、われわれは、日本水産業の個別的分析の徹底につとめるとともにその総合的視点からの研究、さらに、世界経済とともに発展振興する方策の樹立に一層精進を加えることを考えたものである。

この様な努力目標にむかってわれわれの調査研究事業を発足させた次第で冊子の生れた処以、またこれへの奉仕の、ささやかな表われである。

昭和四十二年七月

財団法人　東京水産振興会

（題字は井野碩哉元会長）

目　次

東京とクジラ

第五一五号

まえがき……1

東京に分布するクジラ……2

東京湾に定住、あるいは来遊するクジラ……3

伊豆諸島、小笠原諸島近海に分布するクジラ……8

大昔の東京湾とクジラ……11

江戸から昭和に掛けての時代とクジラ……13

東京とクジラの今……36

あとがき……54

時事余聞　編集後記

大隅清治（おおすみせいじ）

略歴

▽一九三〇年群馬県伊勢崎市生まれ。昭和三三年東京大学大学院生物系研究科博士課程修了。農学博士。

㈶鯨類研究所所員、水産庁・東海区水産研究所の研究室長、水産庁・遠洋水産研究所の研究室長、研究部長、企画連絡室長、所長を歴任した後、㈶日本鯨類研究所常勤理事、専務理事、理事長を経て、現在同研究所顧問、太地町立くじらの博物館名誉館長、㈶東京水産振興会評議員。

勲四等瑞宝章、ノルウェー王国功労勲章を受章。

著書に、「クジラは昔陸を歩いていた」（ＰＨＰ研究所）、「クジラと日本人」（岩波新書）、訳書に、「鯨とイルカの生態」（東大出版会）他。

時事余聞

◇…日本と中国、ロシアにおける領土問題はＡＰＥＣ（アジア太平洋経済協力会議）開催に伴い最悪事態を迎えた。尖閣諸島と国後・択捉・歯舞・色丹など北方四島はいずれも中国・ロシアの領土だと主張し、日本側の見解と真っ向対決となった。この溝は容易には埋まりそうもない。

◇…何故、このような状況に追い込まれたのか。なんといっても日本外交の基軸である日米安保が揺らぎきしみ始めたこと。ここも見透かされ両国が歩調を合わせつけ込んできた。それに中国は今後アメリカにとって人口十三億を抱える最大のマーケットであり、アメリカにとって最大顧客であるとの中国の自負心。また中ロ両国とも強い反日に向かわざるを得ない国内の政治状況があること、いくつか複雑な事情を抱え込んでいることなどが推測される。

◇…アメリカには領土的野心はない。戦後、小笠原、奄美、沖縄などを返した。ロシアは北方四島のように一度奪ったものは返そうとしない。中国もチベット、内モンゴル、新彊ウイグルなど、埋蔵資源に目をつけ自国領とした。それに中国は海軍力を強化し海洋進出を加速化させている。日本の海上自衛隊と比べ圧倒的優位に立てば、どういう態度に出るか分からない。

◇…問題は日米安保である。ただアメリカ側は日本支援に回り積極的である。クローリー米国務次官補は「北方領土について米国は日本を支持している」と語り、オバマ政権が北方四島を巡る問題で日本を支持する立場を公式に確認したのは始めてである。またクリントン国務長官は「尖閣は日米安保の適用範囲」だとはっきり語っている。

◇…実は日米安保は日本だけでなく東アジア全域にわたる防衛戦略の要である。その主翼を担っているのが海兵隊である。沖縄が必要なのは予想される危険区域に対し至近距離にあり、広大な演習場があるからだ。普天間はそのそばにある。解決の鍵は思い切った沖縄の振興策と負担軽減策である。菅政権の大胆な取り組みがどう展開されていくかを見守っていきたい。（K）

編集後記

クジラ博士と尊称されている筆者だけに東京とクジラの関係が克明な資料をもとに平易に解説されています。貝塚のクジラや寛政鯨の話や郷土の味としてクジラが江戸で食べられ、その習慣が庶民にも普及したという。武家の日記にも鯨食記録があり、江戸時代の鯨食文化は東京にすっかり根をおろしている。クジラが日本に開国の動機を与えたなど読み物としても最近には稀有なものとして珍重されます。筆者に心から御礼申し上げます。

「水産振興」第五一五号

平成二十二年十一月一日発行（非売品）

編集兼発行人　中澤齊彬

発行所　〒104-0055　東京都中央区豊海町五番九号　東京水産会館五階

財団法人　東京水産振興会

電話（03）三五三三一八一一一

FAX（03）三五三三一八一一六

印刷所　㈱連合印刷センター

（本稿記事の無断転載を禁じます）

ご意見・ご感想をホームページよりお寄せ下さい。

URL　http://www.suisan-shinkou.or.jp/

東京とクジラ

日本鯨類研究所
顧問　大　隅　清　治

まえがき

クジラ（イルカも分類学的にクジラの仲間であり、本稿ではイルカもクジラに含む）が、水中で生活する哺乳類であることは、誰でも知っている。「東京とクジラ」と聞くと、「東京はクジラとは、関係はないでしょう！」と思う人が多いのではあるまいか。狭い東京湾の奥に位置し、ごく一部しか海に面していない東京には、クジラなど分布する筈はないし、勿論東京でこれまで捕鯨が行われたこともないと思われるので、東

京が本当にクジラと関係があることに、疑いを持つのは当然である。しかし実は、東京は、太古からこれまで、そして現在も、クジラと種々の面で関わりを持ってきたのである。

それではこれから、いくつかの側面から、実例を紹介して、それを納得して頂こうと思う。

東京に分布するクジラ

研究者によって分類に関する見解が若干異なるけれども、現在八六種の鯨類が世界の海や大河に生息している。その中で、東アジアの中緯度の端に位置し、暖流と寒流が交差している日本の近海には、その半数近くを占める三九種が分布する。そして、大きな海洋生産力に支えられて、それぞれの種の資源量も豊富である。

東京の海というと、東京湾に面した、東京都のいくつかの区だけが関連する、狭い海域をイメージする方が多いかもしれないが、東京湾で捕れた魚介類（クジラもその一部である）を昔から「江戸前」と称しているし、今では伊豆諸島と小笠原諸島も東京都に属するので、東京は実際には広大な海域を含んでいる。したがって、東京にも、種々の種類のクジラが、豊富に分布しているのである。

日本の近海には、三九種が分布

東京湾の中に、一八種の鯨類が分布することが確認されている

東京湾に定住、あるいは来遊するクジラ

人口が集中し、周囲がすっかり都市化して、水上交通の激しい東京湾（ここでは、広義の、三浦半島の剱崎と房総半島の洲崎を結ぶ線より北側の海面を言う）にも、スナメリ（図1D）が定住している他に、表1に示すように、今でも種々の野生のクジラが東京湾の中で時折見られるのである。

日本鯨類研究所は半世紀以上もの間、日本全国から鯨類の目撃、座礁、漂着、混獲などの情報を集めている。表1は二〇〇四年から二〇〇九年までの間に、東京湾と伊豆諸島、小笠原諸島から報告された、最近の鯨類に関する情報を集計した。

表1では、東京湾の中に、一八種の鯨類が分布することが確認されている。この表には記録がないが、種々の文献でこれ以上の鯨種が、少なくとも過去に、東京湾に入り込んでいたことは確かである。後述のように、江戸時代には、地球最大の動物である、シロナガスクジラまでも迷入したと推定されている。

ハクジラ類の一種のスナメリは、日本近海に分布する鯨類の中で最小の、体長二m に足りない種類であり、東京湾以外にも、仙台湾、伊勢湾、三河湾、瀬戸内海、響灘、有明海、橘湾、大村湾の沿岸の、水深五〇m以浅の水域に、五つの系群が存在、東京湾にいる系群は、仙台湾から相模湾に掛けて分布する。

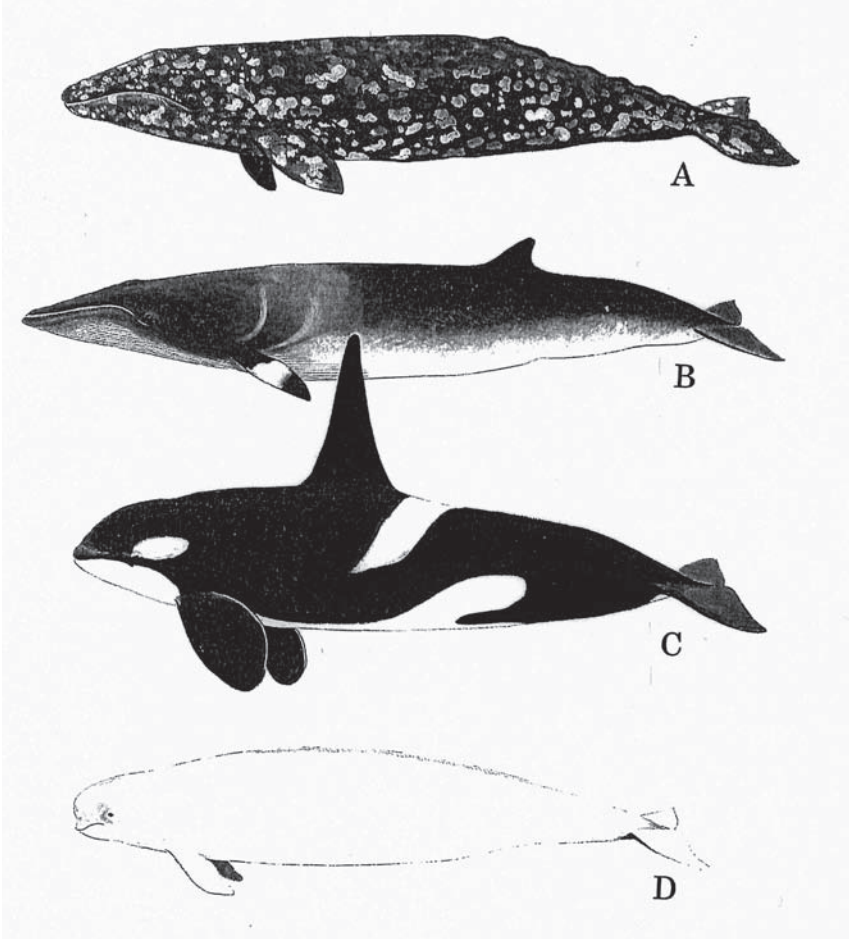

図１　東京湾に来遊するクジラたち（本山賢司氏画）。
A：コククジラ、B：ミンククジラ、C：シャチ、D: スナメリ

表１．2004 年から 09 年の間に東京湾、伊豆諸島、小笠原諸島近海で確認された鯨種と頭数

A.　東京湾

鯨　　種	目視	迷入	漂着	混獲	合計	備考
ザトウクジラ			1	1	2	
ツノシマクジラ				1	1	
ニタリクジラ			1		1	
ミンククジラ			1	１０	１１	
コククジラ		1			1	
マッコウクジラ		1	1		2	
ツチクジラ			2		2	
ハッブスオウギハクジラ			1		1	
コビレゴンドウ			1		1	
ハナゴンドウ			3		3	
カズハゴンドウ			1			
バンドウイルカ	1	1			2	
マイルカ		3			3	
ハセイルカ	1				1	
スジイルカ			3		3	
カマイルカ		1		1	2	
イシイルカ（リクゼン型）			1		1	
スナメリ	7	1		1	9	
合　　計	9	8	１６	１４	４７	

B. 伊豆諸島、小笠原諸島

鯨　　種	目視	迷入	漂着	混獲	合計	備考
セミクジラ			1		1	
マッコウクジラ	1		1		2	
オガワコマッコウ			3		3	
ツチクジラ	1				1	
合　　計	2		5		7	

クジラは本来分布していない水域に入り込むことがある

スナメリは表一に示すように、東京湾の中で目撃されたり、座礁したりする機会が、今でも最も多い鯨種であり、稀に川の下流域を上ることもある。東京では、隅田川の浅草付近でスナメリを見掛けたとの記録があり、筆者もかつて、このイルカが江戸川の河口で泳いでいるのを目撃したことがある。また、筆者が研究者として駆け出しの頃、横須賀の魚市場に水揚げされたスナメリ一体を譲って頂きに行き、今では到底許されないが、横須賀線の電車にそれを載せて、仲間と二人で、月島にあった研究所まで担いで運んだ、懐かしい経験もある。

クジラは本来分布していない水域に入り込むことがある。これを〝迷入〟と呼んでいるが、東京湾にも今でも時々クジラが迷入して、ニュースになることがある。

その中でも、ヒゲクジラ類に属し、体長一四mになる、コククジラ（図1A）は、海岸に沿って回遊する性質があるので、東京湾にも入りやすい。最近では、二〇〇五年の四月下旬に東京湾に迷入して話題を呼んだ。この個体が属すると思われるアジア系のコククジラは、資源量が一〇〇頭前後しかないと推定され、保護が強く求められている。体長七・九mで、子供のこの個体は、しばらくの間、東京湾の中をふらふらと移動していたが、五月一一日に湾の入り口の千葉県富山町の定置網に入って、死んでしまった。その時の朝日新聞の記事を図2に紹介する。

ハクジラ類の一種で雄は、体長八mにもなるシャチ（図1C）が、東京湾に迷入したこともある。一九七〇年四月に、一一頭のシャチの群れが千葉県市原市の白旗運河

図2　東京湾を迷遊した後に定置網に混獲されたコククジラ（2005年5月11日付朝日新聞「迷いクジラ漁網に死体」）。
※編集者注：朝日新聞社の承諾を得て掲載しています。

ミンククジラは、千葉県側の東京湾の入り口に仕掛けた定置網で混獲される場合が多い

で発見された。この時は、付近の建設会社の作業員がウインチ船四隻を繰り出して、古式捕鯨さながらにクジラと格闘し、五頭を捕獲したが、他の個体は逃げ去って、その後は再発見されなかった。また、一九九九年一二月には、二頭連れのシャチが横須賀港沖で発見され、次いで羽田沖と、川崎沖で再発見した後に、見失った。

ヒゲクジラ類に属し、体長八mになる、ミンククジラ（図1B）は、千葉県側の東京湾の入り口に仕掛けた定置網で混獲される場合が多い。希少であるアジア系のコククジラについては、混獲防止に努めるとともに、混獲して死亡した個体の販売は、日本では現在禁止されている。しかし、資源水準が高いミンククジラについては、定置網に入って混獲された場合に、それが生きている場合には、逃がすように努めるが、死んでしまった場合には、後述するように、市場販売が許されている。

伊豆諸島、小笠原諸島近海に分布するクジラ

表1に示すように、この島々の海岸または近海で、座礁、または目視されたクジラは、二〇〇四年から〇九年の間に四種しか記録されていないが、後でホエールウォッチングの項で紹介するように、御蔵島の周囲にはミナミバンドウイルカが周年分布していて、ドルフィンスイミングの対象として、旅行者に愛されているし、小笠原諸島近海では、冬季に繁殖のために来遊するザトウクジラ（図3E）が、ホエールウォッ

一九八八年から二〇年間に、小笠原諸島近海で目視されたクジラの種類は、一九種であった

チングの対象になり、夏には、マッコウクジラ（図3F）や種々のイルカ類もウォッチングされている。

八丈島周辺海域での目視調査によると、分布するクジラの種類として、バンドウイルカ（図3G）、オキゴンドウ（図3H）、ハナゴンドウ、ユメゴンドウ、ハシナガイルカ、シワハイルカ、アカボウクジラ、マッコウクジラ、が記載されている。その他にこの海域に分布するクジラとして、セミクジラ、コククジラ、ニタリクジラ、ミンククジラ、ザトウクジラ、シャチ、コビレゴンドウのマゴンドウ型、カズハゴンドウ、マイルカ、スジイルカ、マダライルカ、サラワクイルカ、が分布する。

小笠原ホエールウォッチング協会が発行する雑誌「メガプテラ」（後述）によると、一九八八年から二〇年間に、小笠原諸島近海で目視されたクジラの種類は、ザトウクジラ、ニタリクジラ、セミクジラ、マッコウクジラ、コマッコウ、アカボウクジラ、コブハクジラ、カズハゴンドウ、コビレゴンドウ、ユメゴンドウ、マダライルカ、シャチ、ハナゴンドウ、オキゴンドウ、シワハイルカ、ハシナガイルカ、バンドウイルカ、サラワクイルカ、ミナミバンドウイルカの一九種であった。ツチクジラとコククジラの他には、伊豆諸島と小笠原諸島の近海に分布するクジラの種類は、共通すると考えられる。

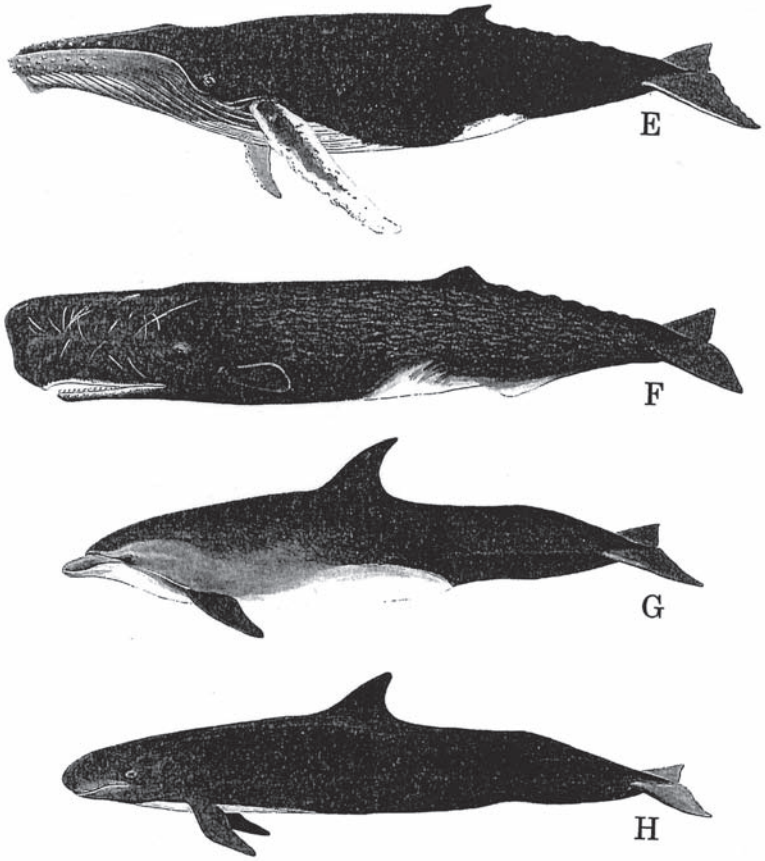

図３　伊豆諸島や小笠原諸島に来遊するクジラたち（本山賢司氏画）。
Ｅ：ザトウクジラ、Ｆ：マッコウクジラ、Ｇ：バンドウイルカ、Ｈ：オキゴンドウ

大昔の東京湾とクジラ

出土地に因んで、「アキシマクジラ」という和名が付けられた

アキシマクジラとヒノクジラ

昭島市を流れる多摩川の河川敷で、一九六一年八月に大型のクジラの化石が発見された。直ちに発掘が行われて、大変珍しいことに、ほぼ全身の骨格が採集された。そして、化石骨格を研究した結果、このクジラは約一六〇万年前の更新世初期に生息していた、現生のコククジラに近縁の種類であることが明らかにされ、出土地に因んで、「アキシマクジラ」という和名が付けられた。

このクジラが生きていた時代は、間氷期に当り、世界の氷河が融けて海水面が上昇し、東京付近では現在の昭島市の辺りに海岸線があった。このクジラは体長が一六ｍあり、当時の海岸に座礁したか、漂着した後、体が急速に砂に埋もれて、体が腐っても、幸いにも骨格が波によってばらばらにされずに、纏まって化石として残ったと思われる。

アキシマクジラは、発見の直前に町村合併でできた昭島市のシンボルとされ、町興しの一環として、一九七三年から「昭島くじらまつり」が毎年八月上旬の土、日曜に開催されている（図4）。また、「昭島くじらの歌」や「昭島くじら音頭」が作詞、作曲され、市のマンホールの蓋や、道路標識、街の案内板にも、クジラのシンボルマー

クが付けられている。このアキシマクジラの骨格は、国立科学博物館新宿分館に保管されており、その一部が、昭島市役所のロビーに飾られている。

アキシマクジラの発見から一〇年後の一九七一年に、今度は日野市を流れる多摩川の川底からも、クジラの化石が発見された。この化石は残念ながら、顎の骨の一部しか出土しなかったが、発掘して研究した結果、アキシマクジラとは別種のヒゲクジラであることが分かり、「ヒノクジラ」と命名された。現在この化石は「日野市ふるさと博物館」に保管されている。

日野市を流れる多摩川の川底からも、クジラの化石が発見された

貝塚のクジラ

東京には貝塚が方々にあるが、中でも大森貝塚は、お抱え外国人教師のモース博士が明治一〇年（一八七七年）に発見したことで、

図４　「昭島くじらまつり」のステッカー。

日本の考古学発祥の地として有名である。この貝塚は今から約三〇〇〇年前の縄文後期のものであり、イルカやクジラの骨が、マグロやタイの骨とともに、出土している。

その他に、東京湾周辺の多くの貝塚の中から、食用にされたと推定される、多数のイルカの骨が出土している。それらは、富津市の大坪貝塚、館山市の稲原貝塚、横浜市の称名寺貝塚、横須賀市の吉井貝塚などである。さらに、船橋市の古作貝塚からは、木の実を擦り潰す臼として使われたと推定される、クジラの脊椎骨が出土した。

東京湾周辺の多くの貝塚の中から、食用にされたと推定される、多数のイルカの骨が出土している

江戸から昭和に掛けての時代とクジラ

それからずっと下って、江戸時代においても、クジラは江戸と種々の関わりを持っていた。そして、徳川幕府が大政奉還し、明治政府が京都から都を移して東京に名称が変わった、明治時代以降、現代まで、東京とクジラとの関係は、種々に変化しながらも、続いている。

寛政の鯨

「文政の駱駝」、「享保の象」と並んで、「寛政の鯨」は、江戸の町を騒がせた三大珍獣のひとつとして、有名である。このクジラは、寛政一〇年（一七九八年）五月一日に内海（うちつうみ、東京湾の江戸期までの呼称）に迷入し、漁師達によって品川

大勢の見物客が、高い船賃を払って船を繰り出して、見物に押し寄せた

の州崎沖で捕まった。それを現在の浜離宮付近まで曳いてきて、時の将軍徳川家斉が御殿から見物し、その後品川の海に戻して、大勢の見物客が、高い船賃を払って船を繰り出して、見物に押し寄せたという、今世界的に普及しているホエールウオッチングの、日本における先駆けのような事件であった。

このクジラについては、「品川の沖に止まりしせみくじら、みなみんみんと飛んで来るなり」と狂歌にも歌われている。また、この事件の約半世紀後に歌川国芳によってこのクジラが描かれた、「大漁鯨のにぎわい」の錦絵も有名である（図5）。しかし、捕獲当時の代官大貫次右衛門による報告書の「鯨見分書」に記載された、体の各部長の測定値（図6）を調べた「勇魚文庫」の細川徹氏は一九九五年に、このクジラは、実際にはセミクジラではなく、体長一六・五mのシロナガスクジラであったと推定した。筆者も別の資料を調べて、細川氏の意見に同意した。

今でも北品川の利田（かがた）神社の境内に「鯨塚」があるが、この塚は、このクジラがしばらくの間見世物になった後で、その頭部を神社の境内に埋めた上に築かれたと言われる。因みに利田神社は、歌川広重の錦絵「名所江戸百景」の「品川すさき」に描かれている。

鯨塚といえば、東京湾岸では、今でも、鯨塚が数多く見られる。後述の千葉県南房総市勝山では、醍醐組という捕鯨組織があった関係で、今も五〇基もの鯨塚が存在する。知人の佐藤快和氏が調べたところによると、神奈川県三浦市三崎にも、天保五年

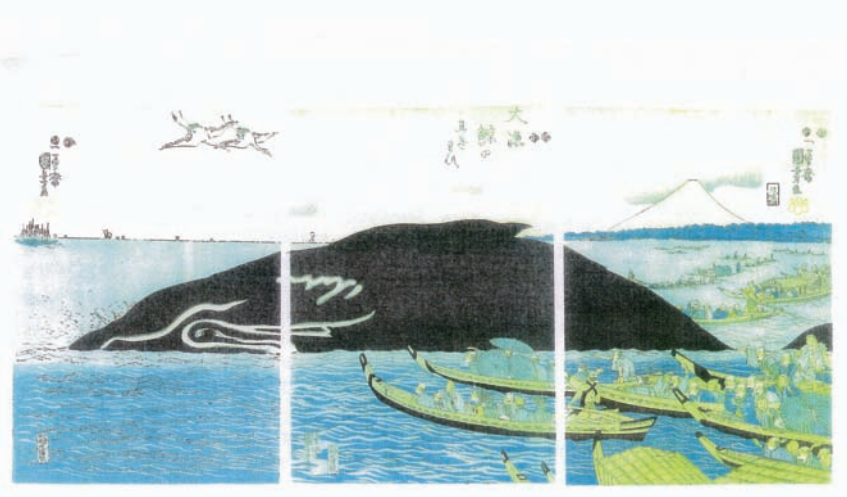

図5　寛政の鯨「大漁鯨の賑わい」（歌川国芳作）。

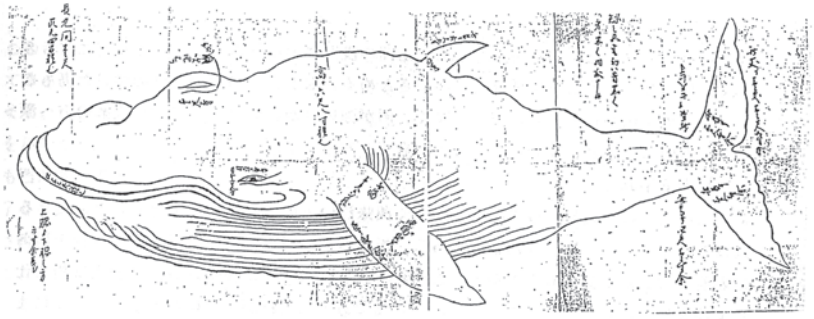

図6　大貫次右衛門の「鯨見分書」の中の絵図。

（一八三四年）に建てられた「くぢら塚」があるとのことである。この塚の謂れはまだ不明のようである。また、千葉県浦安市当代島にある稲荷神社の境内には、「大鯨の御社」（図7）が建てられ、その中に「大鯨」の碑が祀られている。この碑の由来によれば、明治八年（一八七五年）に葛西沖の三枚洲で二人の漁師が捕獲した大きなクジラが当時の二百円の高値で売れたものの、大金を手にして有名人になってしまったその漁師たちがその後仕事が手につかなくなったので、生活を改める戒めのために碑を奉納したとのことである。

クジラの見世物

「寛政の鯨」は、死んだ個体を見物させたから、野外の水中に置かれたとはいえ、〝ホエールウォッチング〟というよりも、〝クジラの見世物〟というべきかも知れない。

見世物といえば、嘉永四年四月一一日に大井御林猟師町（おおいおはやしりょうし）の浜に流れ着いた三間余（約六m）のクジラはイワシクジラと記録され、浅草で見世物にした後に、油を搾り、頭を鯨洲八幡神社に埋めて、鯨塚を造ったという。

また、明治八年（一八七五年）の郵便報知新聞が、月岡芳年（大蘇芳年）による錦絵（図8）で伝えたところによれば、体長一一mほどのクジラが千葉県の西浦海岸で捕獲され、これを買い取った男が、許可を得て、深川安宅（あたけ）町（現在の江東区新大橋）の元御船蔵跡で見世物にし、大勢の見物客が集まって、大繁盛をしたと報じている。

図7　稲荷神社の「大鯨の御社」（栗原修氏写）

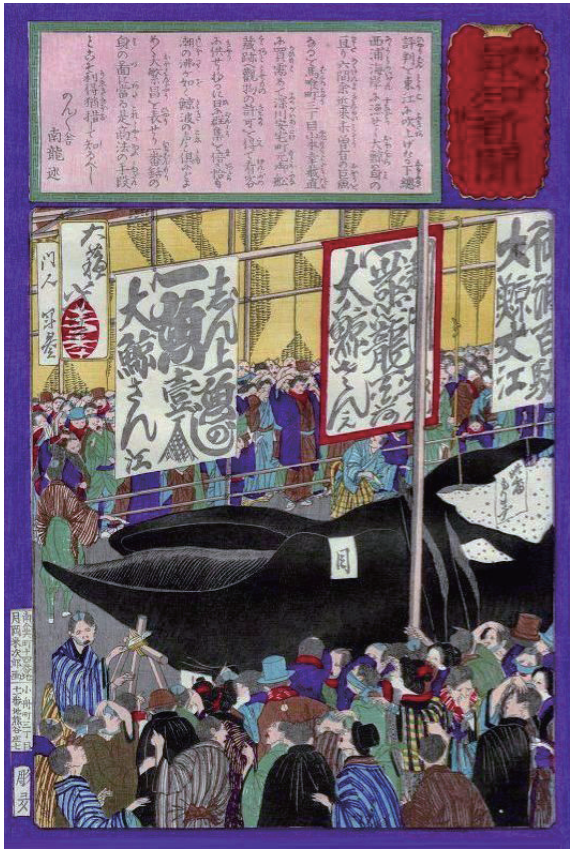

図8　明治時代のクジラの見世物の錦絵。

この錦絵を見ると、このクジラはナガスクジラ属に属するヒゲクジラの一種であり、見物人の中には鼻をつまんでいる人もいることから、展示している内に次第に腐ってきて、臭気がよほどひどくなったと思われる。なお、前出の浦安「大鯨」の碑の鯨が捕獲された年とこの錦絵が描かれた年が同じであることから、両者のクジラは同じものではないかという記述もある（巻末の参考文献⑥など）。

最近では、一九六五年四月からしばらくの間、体長二〇m、体重五八トンの、「ヨナス巨鯨」と名付けられたナガスクジラが、東京都稲城市にある、「よみうりランド」で公開されたことがある。このクジラは北大西洋で捕獲され、スイスの興行師が丸のまま買い取り、内臓を抜き、全身に防腐処理をして、自動車で牽引する長いトレーラーに乗せて、見世物として世界中を巡業した。その途中で来日したのである。この興行には、筆者も付属の展示やこのクジラのメインテナンスを手伝ったので、思い出が深い。

博覧会とクジラ

明治から大正に掛けての時代に、水産の振興と優良技術の普及を図る目的で、種々の博覧会が全国で開催されたが、その中で、東京で開催されたこの種の博覧会の中で、クジラに関係するいくつかを紹介する。

農商務省が主催した「水産博覧会」の第一回が、東京の上野公園で明治一六年（一

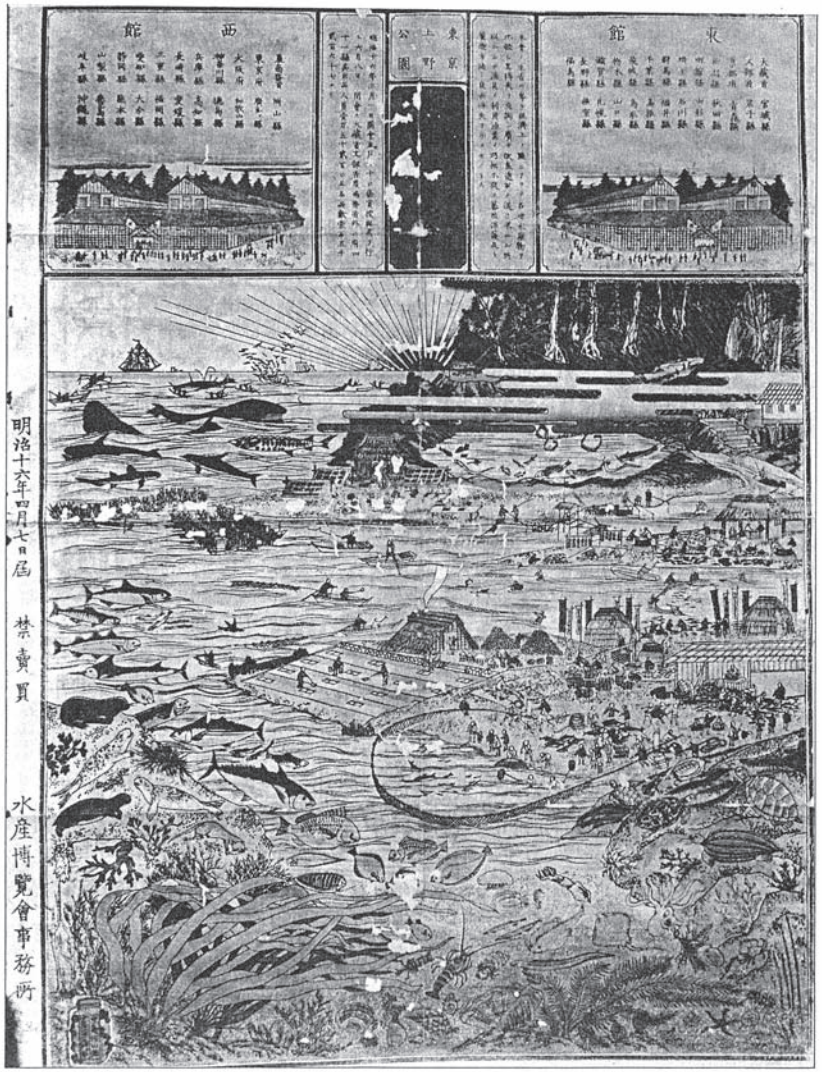

図９　第一回水産博覧会のポスター。鳥瞰図の左上に、クジラと捕鯨シーンが小さく描かれている。

上野公園で開催された「海事水産博覧会」

八八三年）三月一日から六月八日までの間に開催され（図9）、多くの参加者で賑わったという。この博覧会には、捕鯨関係者も積極的に出品し、捕鯨事業の出品として、紀伊の国佐野村の鯨組、土佐の津呂捕鯨会社と浮津捕鯨会社、肥前の国の平戸村捕鯨社と小川島捕鯨組、肥前の国有川村の鯨組、の六件と、捕鯨図書として東京の京橋区八丁堀の森立之氏が「勇魚取絵詞」ほか七種の一件を出品した。

また、一般産業を対象とする、「内国勧業博覧会」の第一回から第三回が、明治一〇年、一四年、二三年に、同じく上野公園で開催された。この中で第三回の博覧会には、捕鯨関係として、五島捕鯨㈱から捕鯨敷網の模型が出品されたとの記録がある。

さらに、「海事水産博覧会」が大正五年（一九一六年）に、これも上野公園で開催された。この時には、会場内の建物の外に、東京帝国大学理科大学からナガスクジラの全身骨格が出展されて人目を引いた。同大学は館内に、イルカ類の骨格と歯も出品した。個人二人から、捕鯨に関する二種の図書（勇魚取絵詞、鯨肉調味方）と「鯨之図」が出品されたと記録されている。また、東洋捕鯨㈱からくじらひげ、鯨骨、鯨歯と、それらを材料とする細工物が出品された。さらに同社から天皇陛下への献上品として、マッコウクジラの歯で作った一対の唐獅子の置物と、セミクジラの塩蔵本皮二樽があった。

下って、昭和七年（一九三二年）一月二二日から二月二日の間、新宿にあった老舗百貨店「ほてい屋」（後に伊勢丹により買収）の、六、七階と屋上で、東洋捕鯨㈱が

江戸の祭礼には、動物を模した曳山が多く出され、クジラや鯨舟もしばしば登場

主催し、東京市教育局などが後援した「鯨に関する展覧会」が開催されたことがある。これには、主催者の東洋捕鯨㈱を始め、農林省水産講習所などの機関や個人から、捕鯨とクジラに関する多数の出品があった（「鯨遊」誌4号に、その目録が紹介されている）。

祭礼とクジラ

江戸の天下祭りは、京都の祇園祭、大阪の天神祭とともに、日本三大祭りの筆頭に数えられた。天下祭りとは、神田祭と山王祭を合わせた名称である。

江戸の祭礼には、動物を模した曳山が多く出され、クジラや鯨舟もしばしば登場した。神田祭を描いた錦絵にクジラの山車が描かれ、山王祭には、曳山として、安永三年（一七七七年）、文化九年（一八一二年）、に、行列の三〇番に、小網町から、長さ一七mの大鯨の山車が曳かれ、文政九年（一八二六年）、万延元年（一八六〇年）には、南油町（現在の中央区日本橋二丁目）から鯨舟の山車が出たとの記録がある。

江戸の祭りのひとつの、深川富岡八幡宮の文化四年（一八〇七年）の祭礼に勢子舟（江戸時代の捕鯨船）にクジラの山車、浅草三社権現の文政六年（一八二三年）の祭礼に浅草田原町から、三〇人の子供が綱で引いたクジラの曳山が出されたなど、枚挙に暇がない程の記録が残っている。

このように華やかだった江戸の祭りは、江戸時代の末期に一時衰えたが、明治時代

に入って復活した。しかし、東京が近代化し、市内に電線が張り巡らされ、市電も走るようになり、山車が街路に繰り出すのがむずかしくなって、神田祭は明治一七年、山王祭は明治二〇年、深川祭りは明治二五年を頂点として、以後急速に衰えていった。

古川柳とクジラ

江戸時代の川柳を「古川柳」または「江戸川柳」といい、庶民の文芸として、当時の庶民の生活の悲哀が、ユーモアたっぷりに詠まれているが、クジラに関連した句も、意外に多い。江戸時代には、我が国の沿岸でクジラが盛んに捕獲され、交通、運輸の発達とともに、クジラの肉や皮が、食品として江戸の庶民の生活にも溶け込んでいた証拠である。

江戸には捕鯨場はなかったが、捕鯨場を有する諸藩から出向した江戸詰めの武士やそのお抱え職人や商人を多く抱えていた。千石船などで、捕鯨場からクジラの産物が江戸に運ばれて、郷土の味としてのクジラが江戸で食べられ、その習慣が江戸の庶民にも普及した。従って、鯨食を題材とする川柳が、江戸で盛んに詠まれた。以下に、それらの中で、年末の煤払いの行事に関連した、古川柳のいくつかを挙げる。

郷土の味としてのクジラが江戸で食べられ、その習慣が江戸の庶民にも普及し、鯨食を題材とする川柳が、江戸で盛んに詠まれた

・魚偏に江の字くじらと書かせたい

クジラは魚偏に京と書くが、江戸っ子は、天子様のいらっしゃる京都に対抗して、クジラは、魚偏に京都の〝京〟の字ではなく、幕府が存在する江戸の〝江〟と書くべきだと主張した。それほど、クジラは江戸の庶民にも良く知られた存在であった。

・江戸中で五六匹喰う十三日

旧暦一二月一三日は、正月を迎える準備として、家の煤払いの日であった。江戸の武家や商家には、その日は、出入りの職人たちが煤払いの手伝いに来たものである。その日には、各地の捕鯨地から運ばれた、塩蔵の本皮や畝須（ナガスクジラ科のクジラの喉から腹に掛けての、皮と肉が付いている部分）を食材として、くじら汁が作られた。そして、煤払いの作業が終わると、恒例の胴上げ（後述）の後で、手伝いの人にくじら汁が振舞われた。多くの商家や武家でそのようにして大量のクジラ製品を使うので、その日に江戸全体では、大きなクジラが五、六頭も食べられるであろうと詠んだ江戸っ子は、当時それだけ大量にクジラが江戸で食べられていたことを、実感していたのであろう。

・采配で呼び返えさるる鯨売り

煤払いの日、くじら汁を作ろうと、女中さんが掃除する手に持った、はたきを采配のように使って、店を通り過ぎた鯨売りを呼び返す風情を詠んだもの。江戸の町には、塩鯨の入った箱を両端にくくった、天秤棒を担いだ棒手振りが、日常的に町を回っていた。それほど鯨は、食品として江戸に普及していた。

煤払いの作業のあと、手伝いの人にくじら汁が振舞われた

・鯨売り胴に突く内銭を待ち

江戸では、煤払いが終わると、鯨汁が振舞われる前に、祝儀として、その場にいる一同を、次々に胴上げする習慣があった。鯨売りはそれが済むまで、勘定の支払いを待たされたものである。

・内蔵助鯨を売りに行けという

一二月一四日の赤穂浪士の討ち入りの前日に、大石内蔵助が部下に「鯨売りにでも扮して、吉良邸に出掛けて、鯨を売りながら、内部の様子を探ってこい」と命令したという意であり、江戸っ子は誰でも、その前日の煤払いの日に、鯨汁を食べる習慣があることを知っていたから、この句の面白さが理解されたのである。

・くじら汁喰うてしまえば暇乞い

武家や商家の煤払いの手伝いに来た職人たちは、仕事が終わった後に振舞われる、カロリーの高いくじら汁を飲んで、疲れを取り、体を温めて、師走の晩の寒い中を帰っていった。この習慣が江戸の年末の風物詩であった。

・くじら汁椀を重ねて叱られる

本皮や畝須で作る鯨汁は、油分が多く、食後に油の付いた食器を洗うのが、合成洗剤がなかったこの時代では、一苦労であった。そこで、下女が食後の片付けに椀を重ねると、椀の両面に油が付いてしまうので、お内儀に叱られたものである。

江戸時代には、江戸でも家庭で鯨料理が一般的に食べられていた

・鯨汁たわしをひとつ捨てるなり

上の句と似ていて、鯨汁を作った日は、鍋や椀に付いた鯨の油を落とすのに、たわしが磨り減ってしまって、捨てる他はないほどであり、どの家も食事の後片付けに手を焼いたようである。

ある武家の日記から見た江戸の鯨食記録

世田谷に居を構えていた、彦根藩の江戸詰め代官の妻、大場美佐による安政七年（一八六〇年）から元治二年（一八六五年）の間の日記によると、一二月八日、一五日、大晦日、元日から三日間、一月二十日の恵比寿講の夜には、鯨汁が出された。また、贈答品として、鯨肉が使われており、さらには、伊勢（当時は捕鯨場が近くにあった）の暦売りの御師が暮に大場家に宿泊し、その土産物に塩鯨が記載されていたことが、日記に記されている。

この一例が示すように、江戸時代には、江戸でも家庭で鯨料理が一般的に食べられていたことが判る。江戸城下では、鯨肉を素材にした「鯨鍋」、「味噌汁」、「澄まし汁」などが食され、「くじら熨斗」などといわれていた〝かぶら骨（鼻軟骨）〟を加工した珍味も江戸で売られていた。

「駒形どぜう」のくじら鍋とくじら汁

台東区駒形にある「駒形どぜう」は、享和元年（一八〇一年）の創業で、今でも続く、ドジョウ専門の老舗の料理屋として、有名である。面白いことに、この店で今でもくじら料理も食べられるのである。

この店でくじら料理を出すようになった切っ掛けは、二代目の店主が、当時江戸で鯨食に人気があったので、〝小さな魚であるドジョウと、大きな魚であるクジラを、合わせて店で料理して提供すれば、両者の対比が面白く、話題になるだろう〟と考え、天保一一年（一八四〇年）に、〝くじら汁〟と〝くじら鍋〟を店のメニューに加えたことにあったという。くじら汁は、塩蔵の本皮を水で戻し、薄くスライスして、これと笹がきゴボウを具にした味噌汁であり、くじら鍋は、笹がきゴボウとクジラの本皮を割下で煮込む鍋物である。

江戸では、「駒形どぜう」に限らず、どじょう鍋屋でくじら汁が出されるのが一般であり、明治末期には、どじょう汁が一銭五厘で、くじら汁は二銭五厘であったという。

「駒形どぜう」では、今も、ドジョウと共に、クジラを食材として、当初の料理法を守り続けて、客に江戸の味を提供している。現在では、駒形の本店（図10）の他に、渋谷区宇田川町にも支店を出している。

明治末期には、どじょう汁が一銭五厘で、くじら汁は二銭五厘であった

図10 「駒形どぜう」の店先（山本徹氏写）

図11 錦絵「びくにはし雪中」（歌川広重作）。

山くじら

歌川広重が描いた「名所江戸百景」の錦絵の一枚に、安政五年（一八五八年）に出版された「びくにはし雪中」がある（図11）。この絵の中には、「山くじら」の看板が大きく立っている。この絵を見て、山でクジラが捕れるわけがないと、怪しく思われる人がおられるのは、当然である。しかし、それには訳がある。

六世紀に仏教が日本に伝来して以来、歴代の天皇が仏教に深く帰依すると共に、イノシシなどの獣類を殺して食べることを禁じる「生類憐みの令」が度々出された。しかし、哺乳類であっても、海に棲み、獣のように四つ足がないクジラは、サカナであると看做されて、クジラを捕獲して食用にすることが、サカナと同様に、許された。それによって、日本独自の古式捕鯨が発達したのである。江戸時代には、表向き獣肉食は忌避されてはいたが、実際にはかなり普及していた。そして、当時から庶民は、〝イノシシは、山に棲むクジラである〟と言い訳をして食べていたことから、イノシシに「山くじら」の名が付けられた。

江戸市中で、獣肉を料理する店がいくつかあり、広重は、当時外堀と京橋川が合流する所に架かっていた、「比丘尼橋」のたもとにあった、山くじらを出す料理屋であった「尾張屋」を、江戸名所のひとつとして取り上げて、描いたとされる。この店では、イノシシの肉とタマネギを割下で煮込んだ鍋料理を出していたとのことである。この絵で描いたように、脂の乗った山くじらは、雪のちらつく寒い夜には、格好の料理だっ

当時から庶民は、〝イノシシは、山に棲むクジラである〟と言い訳をして食べていた

たのだろう。

配給、給食とクジラ

前述のように、江戸時代から鯨食文化は、江戸でしっかりと根を下ろしていた。しかし、欧米の帆船捕鯨船団が日本の近海で盛んに操業する一八四〇～五〇年代以降になると、古式捕鯨の対象鯨資源が急速に減少し始め、鎖国政策によって沿岸に接近するクジラだけを捕獲することが許される、受身の古式捕鯨は沿岸に来遊するクジラが減少して、衰退してきた。その結果、クジラ製品の供給量も次第に減少して、明治時代に入ると、クジラ製品は東京の庶民の口に入りにくくなってきた。

しかし、明治三二年（一八九九年）に、ノルウェーから近代捕鯨技術の導入に成功すると、日本の捕鯨は復活し、次第に鯨肉の供給量も増加し、鯨肉の缶詰なども製造されるようになってきたが、東京の庶民は、その味を忘れかけていた。東京で鯨肉の利用の復活をもたらしたのが、一九三四年の南氷洋捕鯨への進出と日中戦争であった。戦争の激化とともに、食糧が不足し、昭和一三年（一九三八年）に公布された「国家総動員法」を切っ掛けにして、水産物も含めて、生活必需物資が配給制になり、鯨肉が配給物資として供給するようになると、鯨肉が庶民の貴重な動物蛋白源となった。

太平洋戦争末期の一九四四年に六大都市の小学生に対して、学校給食が開始され、戦後の一九五四年に「学校給食法」が成立した。一九七〇年代まで、「竜田揚げ」に

一九七〇年代まで、「竜田揚げ」に代表されるくじら料理は、東京の学校給食にとっても、定番のおかずであった

代表されるくじら料理は、東京の学校給食にとっても、定番のおかずであった。しかし、捕鯨規制の国際的な強化により、くじら料理は一九八〇年代に、学校給食からほぼ姿を消した。

国際捕鯨委員会による商業捕鯨の中止以後に開始された調査捕鯨により、鯨肉が調査副産物として生産されるようになった。調査捕鯨の拡大に伴い、学校給食にクジラのメニューを復活させた地方自治体が次第に増えているが、東京ではいまだにそれが復活していない。

後述の日本鯨類研究所は、二〇〇三年から、朝日学生新聞の協力を得て、全国の小・中学校で、総合学習「クジラについて学ぼう」を行い、授業の後の給食の際に、クジラの料理を食べる活動を、全国公募で選ばれた小・中学校で展開している。その一環として、東京都内の小・中学校の数十校が、すでにこの授業と給食を受けている（図12）。

江戸時代から昭和期までの東京近郷の捕鯨

内海（東京湾）の最奥に位置する江戸には、昔から捕鯨は産業としてはなかったけれども、湾の入り口では、江戸時代から大規模の捕鯨が行われていた。それは、勝山（現在の南房総市鋸南町）を基地として、東京湾口に初夏に来遊するツチクジラを対象にして操業した、突取式捕鯨である。

湾の入り口では、江戸時代から大規模の捕鯨が行われていた

図12　青山学院小学校での「クジラ博士の出張授業」の後の給食風景（山本徹氏写）。

明暦元年（一六五五年）に、ここで鯨組を組織して捕鯨を開始したのは、初代の醍醐新兵衛である。勝山を基地にした「醍醐組」は、九代目の醍醐新兵衛まで捕鯨操業を続けたが、明治四年（一八七一年）に組織を解体した。

明治三一年（一八九八年）には、館山に本社を置く房総遠洋漁業㈱が設立され、館山を基地として、グレナー銃を使用する、新式の捕鯨法を導入して、ツチクジラ漁を引き継いだ。その後明治三九年、房総遠洋漁業㈱は、社名を東海漁業㈱に変更し、捕鯨基地を白浜、千倉と、次第に漁場を外房海域に移して行った。したがって、東京湾内での捕鯨は、明治時代の終わりには消滅したことになる。

その後、一九四七年に創立した外房捕鯨㈱が、現在も南房総市和田浦を基地として、農林水産大臣の許可を得て、小型捕鯨船で、国際捕鯨委員会（ＩＷＣ）の管理の対象外である、ツチクジラの捕獲を続けている。

小笠原諸島も古くから捕鯨に関係してきた。欧米の帆船捕鯨船は、一八二〇年から日本の近海で操業を開始し、小笠原諸島を含む日本近海は、〝ジャパングラウンド〟と称されて、マッコウクジラの好漁場として欧米の捕鯨者に有名になった。そして、父島の二見湾がアメリカ式捕鯨船の薪、水、食料の重要な補給地として使用された。後述のペリー艦隊も浦賀に来航する前に、ここを訪れていることは、この島の補給基地としての重要性を意味している。この島に居着いた当時の捕鯨船の乗組員の子孫が、今でも小笠原で生活している。その意味で小笠原諸島は、「東京とクジラ」に古くか

小笠原諸島を含む日本近海は、〝ジャパングラウンド〟と称されて、マッコウクジラの好漁場として欧米の捕鯨者に有名になった

ら関わっているのである。

明治三二年（一八九九年）にノルウェーからの技術導入に成功した日本の近代捕鯨が、日本の各地で捕鯨基地を建設して急速に発展し、小笠原近海で基地式捕鯨を開始したのが、一九二三年からであった。最初父島、次いで母島を基地にして、マッコウクジラ、ザトウクジラ、シロナガスクジラ、ナガスクジラ、イワシクジラ、ニタリクジラを捕獲対象にしていた。しかし、太平洋戦争に敗れた一九四五年から、小笠原諸島は米国の委任統治となって、日本はそこでは基地式捕鯨操業ができなくなった。敗戦後の食糧危機を救うために、占領軍総司令部の許可により、一九四六年から一九五二年まで、小笠原近海で小規模の母船式捕鯨が行われた。その後一九八一年から、日東捕鯨㈱と日本近海捕鯨㈱が共同で、母島を基地として、ニタリクジラを捕獲対象にして、沿岸操業を行ったが、一九八七年に日本がＩＷＣによる捕鯨禁止措置を受け入れた以後は、ここでの捕鯨が中断している。

東京湾には、かつては、母船式捕鯨船団の基地が二箇所にあった。大洋漁業㈱（現在のマルハ・ニチロ）は横須賀市田浦港に大きな捕鯨基地を持ち、最盛期には三つの捕鯨船団が、この基地から南極海あるいは北洋の捕鯨場に出漁した。極洋捕鯨㈱（現在の㈱極洋）は横浜港を捕鯨船団の基地にして、最盛期には二船団がこの港から出漁した。

これに関連して、港区芝の増上寺において、極洋捕鯨㈱が施主となって、捕鯨が盛

東京湾には、かつては、母船式捕鯨船団の基地が二箇所にあった

んであった昭和三〇～四〇年代に、この会社が捕獲したクジラの供養が盛大に営まれていた。

クジラが日本に開国の動機を与えた

開国と捕鯨

嘉永六年（一八五三年）に、米国のペリー提督が四隻の艦隊を率いて江戸湾に来航し、浦賀に停泊して、江戸幕府に開国を迫った事件は、ＮＨＫの大河ドラマ「竜馬伝」でも取り上げられて、有名であるが、この日本に開国を迫る米国政府の主目的が、当時日本近海で操業する数百隻にも達していた自国の捕鯨船団の、食料、燃料、水の補給と時化の際の避難、および乗組員の休養のための、港の使用を求めるところにあったことは、余り知られていない。つまり、クジラが日本に開国の動機を与えたのであり、そして、東京湾がその場となったのである。

国際捕鯨委員会（ＩＷＣ）と東京

世界の鯨類資源の合理的管理と、捕鯨業の健全な発展を目的として、国際捕鯨取締条約が一九四六年に米国で締結され、その執行機関として、ＩＷＣが設立されたのが、一九四八年であった。当時占領下にあった日本は、平和条約が発効した年の直前の一九五一年に、この条約への加盟が許された。

ＩＷＣは一九四九年以来毎年、世界の各地で年次会議を開催して、鯨類の資源管理

東京で二回、ＩＷＣ年次会議が開催

最近の年次会議は、約一ヶ月の長期間に亘っている

と捕鯨の取締り方策を取り決めてきており、二〇一〇年までに、年次会議の開催は六二回を数える。その中で、日本政府はこれまでに四回ＩＷＣの年次会議を招致しており、その内、東京で二回、ＩＷＣ年次会議が開催されている。

一回目は、一九五四年に第六回年次会議が、千代田区永田町二丁目にあった、東京グランドホテル（現在は存在しない）で開催された。この年次会議は、七月一九日から二三日までの間に開催された。参加国は一一ヶ国であり、会議参加者は、加盟国代表団四五名、非加盟国オブザーバー五名、国際政府機関オブザーバー二名、事務局員一名（日本の臨時事務局員を除く）、合計五三名であり、現在と比較すると、小規模な国際会議であった。

それから一四年後、日本政府による二回目の招致で開催された、第二〇回年次会議は、港区芝公園の東京プリンスホテル（現在も存在する）で、一九六八年六月一七日からの科学委員会から始まり、本会議は二一日から二八日の間に開催された。会議参加国は一四ヶ国であり、加盟国代表団五七名、非加盟国オブザーバー四名、国際政府機関オブザーバー六名（内一名は英国代表団を兼ねる）、事務局員二名、合計六八名であった。この年次会議の議長は、日本政府代表の藤田巌氏（日本捕鯨協会会長）であった。そして筆者も、日本代表団の一員として、科学委員会会議からこの年次会議に参加した経験を持つ。

因みに、最近の年次会議は、科学委員会会議から始まり、約一ヶ月の長期間に亘っ

ている。二〇一〇年現在の条約加盟国は八八ヶ国であり、二〇一〇年にモロッコ国のアガディルで開催された年次会議は、参加国七三ヶ国、加盟国代表団二五九名、非加盟国オブザーバー一名、国際政府機関オブザーバー七名、事務局員五名、公式通訳六名、非政府機関オブザーバー五一機関、一三三名、合計四一一名であった。

最近の、大勢が参加し、長い期間を掛けて、お祭り騒ぎをするだけで、何も決められないＩＷＣ年次会議に比べると、東京で開催された、第六回、第二〇回の年次会議の時は、本当に、古き、良き、そして、実りの多い、時代であった。

東京とクジラの今

現在でも、東京とクジラは、次のように、種々の側面で関係を持っている。

捕鯨業

前述のように、近代捕鯨時代に入ってからも、東京では、かつて小笠原諸島で母船式捕鯨が行われ、基地式大型捕鯨業も、ＩＷＣによる商業捕鯨の一時中止が実施される一九八七年まで小笠原の母島で営まれていた。しかし、ＩＷＣの決定により、未だにそれが中止されたままになっている。小型捕鯨業は現在も、農林水産大臣の許可漁業として、ＩＷＣの管理外のツチクジラを対象にして、南房総市で操業しているが、ＩＷＣの決定により、未だに中止したままになっている

漁場と基地はかつての湾口の勝山から、外房の和田に移ってしまっている。この捕鯨の継続によって、伝統的な鯨食品の〝たれ（ツチクジラの肉を薄く切って塩水に付けた後干して、作られる）〟は、南房総市の一帯で製造され、東京でも、酒の肴として、好まれている。

日本では現在も、各県知事の許可の下で、ＩＷＣの管理外の鯨種を対象にして、イルカ突きん棒漁業（北海道、青森県、岩手県、宮城県）と、イルカ追い込み漁業（静岡県、和歌山県）が行われているが、東京ではそれらの漁業は存在しない。

後述するように、中央区豊海町にある、「財団法人・日本鯨類研究所」は、日本政府の委託を受けて、一九八七年

図13　大井水産埠頭に入港した調査母船日新丸（大隅清治写）。

〝鯨類捕獲調査〟を継続実施

から南極海、一九九四年から北西太平洋、において、〝調査捕鯨〟と俗称する〝鯨類捕獲調査〟を継続実施しており、この調査のために、同じ豊海町に事務所のある、共同船舶㈱が所有する調査母船・日新丸と目視・採集船三隻を傭船している。そして、それらの調査船の船籍港は東京である。さらに、調査副産物の荷揚げ港として、大井水産埠頭がしばしば使用されている（図13）。これらのことから、東京は現在も捕鯨活動と直接に関係しているといえる。

漁業によるクジラの混獲

漁業によるクジラの混獲は、日本の各地で生じており、現在東京湾でも漁業による混獲が起きているが、それらは全て、千葉県の富津、南房総、館山の間の、東京湾の東の湾口の沿岸に設置してある定置網に集中している。そして、表1に示したように、最近東京湾で混獲された鯨種は、ミンククジラが大半である。

ＩＷＣによる捕鯨中止措置が続いている現在も、前述したように、捕鯨以外の漁業で混獲したクジラについては、生きている個体は逃がすようにし、死んだ個体については、水産庁に報告して、密漁を防ぐために、日本鯨類研究所に鯨肉組織を送付して、個体識別のためのＤＮＡ登録をすれば、市場販売が許されている。したがって、東京でも、このような形の鯨肉が出回ることがある。

伊豆諸島と小笠原諸島において、漁業による混獲の事例は最近ではみられない

表1に示したように、伊豆諸島と小笠原諸島において、漁業による混獲の事例は最近ではみられない。

クジラによる漁業被害

古くからクジラによる有用水産動物の漁場内外での食害、操業中の漁具の損傷や、漁獲物の盗難などの漁業被害が日本の各地で見られ、被害防除策の確立が以前より漁業者から望まれている。東京都でも、現在種々の漁業が盛んに行われており、クジラによる漁業被害が深刻である。

東京都でも、現在種々の漁業が盛んに行われており、クジラによる漁業被害が深刻である

八丈島周辺海域では、キンメダイ立縄漁業、カツオ曳縄漁業、ハマトビウオ流刺網漁業で、バンドウイルカを主とする小型鯨類が、折角の漁獲物を漁具から奪う被害が多く発生し、その金額は三千万円から六千万円に達すると推定されている。

また沖合海域では、マグロ延縄漁業において、オキゴンドウやシャチによる食害も、頻繁に生じている。

ホエールウォッチングとドルフィンスイミング

日本では、北は北海道の羅臼から、南は沖縄の宮古島まで、各地で、船上または陸上からの、ホエールウォッチングが盛んであり、それと共に、イルカと泳ぐ、ドルフィンスイミングも各地で行われている。全国に一四箇所あるウォッチングサイトの中で、東京には二つのサイトがある。

日本でホエールウォッチングの先駆けとなった場所が、小笠原諸島の父島である。一九八八年にザトウクジラのウォッチングツアーがここで最初に行われ、一九八九年には、「小笠原ホエールウォッチング協会」が設立されて、ホエールウォッチングが、観光産業として健全に発展しており、この協会は、ニューズレターとして、ザトウクジラの学名から名付けた「Megaptera」（メガプテラ）誌を発行している。

小笠原でのウォッチングの主対象は、冬季のザトウクジラと、夏季のマッコウクジラである。また、ドルフィンスイミングの対象種として、ミナミバンドウイルカ、ハシナガイルカ、マダライルカ等がおり、マッコウクジラの観察に船で沖に出る際に、コビレゴンドウ、オキゴンドウなどの群れに遭遇することがある。

もうひとつのサイトが、伊豆諸島の御蔵島である。この島の周囲には、約一五〇頭のミナミバンドウイルカが定住しており、海岸から一km以内で、観光船に乗った客はイルカに遭遇できる。東京から比較的に近いこともあって、船上からのドルフィンウォッチングの他に、船から海に入って、イルカと一緒に泳ぐ、ドルフィンスイミングを楽しむツアー客が、春から秋に掛けて、多い。ミナミバンドウイルカの他に、稀にはコビレゴンドウやオキゴンドウも観察できる。

御蔵島では、ウォッチング事業の健全な運営のために、一九九四年には、「御蔵島イルカ協会」が設立された。また、ここでは、「御蔵島バンドウイルカ研究会」によって、長期間に亘って、ミナミバンドウイルカの個体識別による観察が続けられ、優れた研究結果を出している。

現在東京都内では、「しながわ水族館」と「エプソン品川アクアスタジアム」が、クジラを飼育している

クジラを飼育している水族館

日本人はクジラを、サカナと同じく、食べるのも、見るのも、好きであり、クジラを飼育、展示している水族館が、全国で四〇館近くあり、世界で最も多い。その中で、現在東京都内では、「しながわ水族館」と「エプソン品川アクアスタジアム」が、クジラを飼育している。

しながわ水族館は、品川区民公園内にあり、一九九三年一〇月に開館した。ここではバンドウイルカが飼育されている。

エプソン品川アクアスタジアム（図14）は、品川プリンスホテル内に二〇〇五年四月に設立された、最新のユニークな水族館である。そして、この水族館では、オキゴンドウ、バンドウイルカ、カマイルカが飼育され、彼らの華やかなショーで観客を楽しませてくれている。

かつては、東池袋のサンシャイン国際水族館で、イロワケイルカを飼育、展示していたが、この館では、最近は、クジラを飼育していない。

ついでに、東京近郊の、クジラを飼育している水族館を紹介すると、アクアワールド大洗、犬吠埼マリンパーク、鴨川シーワールド、八景島シーパラダイス、新江ノ島水族館、京急油壺マリンパークが挙げられる。

図14 「エプソン品川アクアスタジアム」でのイルカのショー（山本徹氏写）。

図15 国立科学博物館の構内にある、実物大のシロナガスクジラの模型（山本徹氏写）。

クジラを展示している博物館

全国に数ある博物館の中でも、クジラを何らかの形で展示している館は多い。その中で、東京に存在する博物館のいくつかを紹介する。

クジラを展示する自然博物館の中で日本最大の館は、国立科学博物館である。上野公園内の本館では、正面玄関横の構内に置かれた、将に潜水しようとしている、シロナガスクジラの体長三〇mの実物大の模型が、最初に来訪者の目を引く（図15）。ロンドンの自然史博物館や、ニューヨークの自然史博物館にも、実物大のシロナガスクジラの模型が展示されているが、それらは捕獲されて解剖デッキに上げられた、死んだ姿であるのに対して、上野のそれは水中での生きた姿に最も近い。この模型の制作に、筆者も若干お手伝いをさせて頂いたので、愛着がある。シロナガスクジラの以前には、同じ位置にザトウクジラの実物大の模型がしばらくの間展示されていたので、思い出す方もおられると思う。

この博物館の「地球館」では、化石種から、現生の種類まで、クジラの骨格その他の標本が、数多く展示されている。最近では、二〇一〇年七月一〇日から九月二六日まで、特別展「大哺乳類展—海のなかまたち」が開催され、クジラの進化から現在の生活までを、多数の標本、模型とパネルによって、詳しく学べる機会を与えてくれた。

国立科学博物館は、新宿区百人町に分館があり、研修研究館にクジラの各種標本が展示され、本館に多種、数千体のクジラの骨格標本の収蔵室がある。また、裏の独立

「地球館」では、化石種から、現生の種類まで、クジラの骨格その他の標本が、数多く展示されている

した建物で、クジラの骨格標本などの製作が行われている

港区港南にある、東京海洋大学海洋科学部キャンパスにある「水産資料館」には、アメリカ式捕鯨の漁具や処理具などの捕鯨関連標本やクジラの標本が展示されている。また、水産資料館に付設して、「鯨ギャラリー」がある。この中には、一九六二年に筆者がコジアック島近海で採集したセミクジラの全身骨格標本が展示されている。この館にはまた、二〇〇五年に宮城県女川町の定置網によって混獲された、親子のコククジラの内の、体長一二・七mの母クジラの全身骨格が、二〇一〇年に新たに展示された。因みに、体長七・八mの、その子の骨格標本は、石巻市鮎川のクジラの博物館「おしかホエールランド」に展示されている。

さらに、大学構内には、練習船・雲鷹丸の実物を、陸に上げて展示している。この船は一九〇九年に建造された、バーク型の帆船であり、当時はアメリカ式捕鯨の学生実習に使われていた。

品川区のお台場にある「船の科学館」には、捕鯨砲など、近代捕鯨の漁具や写真が展示してある。

大森貝塚遺跡庭園の近くにある、「品川歴史館」には、大森貝塚、寛政の鯨、ペリー来航など、「東京とクジラ」に関係する展示物がある。

クジラに関連する、変わった博物館として、目黒区下目黒にある「目黒寄生虫館」がある。この寄生虫の専門博物館には、クジラに関しても、種々の寄生虫が展示して

「品川歴史館」には、大森貝塚、寛政の鯨、ペリー来航など、「東京とクジラ」に関係する展示物がある

ある。

博物館ではないけれども、クジラグッズの世界的なコレクターが東京におられる。それは、細田徹氏であり、文京区後楽園の自宅で「勇魚文庫」を主宰し、クジラと捕鯨に関係する、郷土玩具、コイン、切手、図書、絵画、写真、絵葉書、捕鯨道具、等、古今東西のあらゆる物品を精力的に収集して研究しており、「鯨遊」というクジラ資料コレクション雑誌も発行している。

彼はまた、横浜市金沢区で「日本近代捕鯨研究室」を主宰する竹内賢士氏とともに幹事役を務め、東京の会場で「鯨展（鯨グッズ玩具展）」を毎年一度開催して、全国から集まるコレクターが出品する、クジラグッズの展覧会を運営している。

水産庁では、毎年夏休み中の「子供霞ヶ関見学デー」の期間に、日本鯨類研究所の協力を得て、クジラ関連の展示を行っている。

クジラに関係する中央政府機関

日本では、多くの中央政府機関が、直接、間接的にクジラ問題に関係している。そして、それらの大部分が東京に存在する。千代田区霞ヶ関にある農林水産省水産庁は、鯨類資源の管理と利用に直接関係する。水産庁の中で、捕鯨問題に直接関係する課としては、資源管理部の遠洋課と国際課がある。そして、遠洋課には、捕鯨班があり、捕鯨業とイルカ漁業の管理、取り締まりに当る。国際課は、国際捕鯨委員会に対応し

水産庁では、「子供霞ヶ関見学デー」にクジラ関連の展示を行っている

ている。

同じく霞ヶ関の外務省の中で、クジラ問題に直接関係する部署として、経済局漁業室があり、ここでは国際捕鯨取締条約などのクジラが関係する、種々の国際条約に対応している。

クジラを研究する機関

東京には大学や研究機関が多数存在し、それらの中には、クジラの研究者も多数いるが、クジラを専門に研究する機関として、財団法人・日本鯨類研究所が、中央区豊海町にある。この研究所の前身は、一九四一年にクジラ製品の品質向上のための研究機関として設立した、「中部科学研究所」まで辿ることができる。この研究所は中央区月島にあったが、太平洋戦争に敗戦後の一九四七年に、鯨類資源の調査研究を目的とする「財団法人・鯨類研究所」に衣替えした。残念ながら、一九八七年の商業捕鯨の一時中止と共にこの研究所は解散し、同年に水産庁の認可団体として、「財団法人・日本鯨類研究所」が、鯨類研究所を母体として設立されて、日本政府の委託を受けて、国際捕鯨取締条約第八条の下での鯨類捕獲調査を実施して、今日に至っている。

日本鯨類研究所とともに、ＩＷＣの科学小委員会とＩＷＣの管理対象外の小型鯨類漁業の管理に対応した業務を進めている研究機関として、「独立行政法人・水産総合研究センター遠洋水産研究所外洋資源部」の「鯨類管理研究室」と「鯨類生態研究室」

太平洋戦争に敗戦後の一九四七年に、鯨類資源の調査研究を目的とする「財団法人・鯨類研究所」に衣替えした

が、東京から少し離れてはいるが、横浜市金沢区に存在する。この研究組織は、水産庁に付属する鯨類資源を研究する組織として、東京の月島にあった旧東海区水産研究所に一九六六年に新設された、「資源部第六研究室」を母体とする。翌一九六七年に清水市（現在の静岡市清水区）に新設された、水産庁・遠洋水産研究所にはじめて「鯨類資源研究室」の看板が掲げられたという経緯がある。

品川区港南にある、「東京海洋大学海洋科学部」の海洋環境学科と海洋生物資源学科には、クジラを研究する複数の教員が所属し、学生とともに、日本鯨類研究所、遠洋水産研究所と協力して、活発に調査研究を進めており、ＩＷＣ科学小委員会にも、委員として対応している。

前述した、国立科学博物館・新宿分館には、「動物研究部脊椎動物研究グループ」に属する鯨類研究室で、主として、日本の沿岸で座礁、漂着したクジラを対象にして、調査と研究が進められている。

捕鯨に関係する会社、機関

商業捕鯨時代には、大洋漁業、日本水産、極洋捕鯨の母船式捕鯨を経営する会社や、日本捕鯨や日東捕鯨のような、基地式捕鯨を営む会社の本社が、東京に置かれており、それらの会社の団体として、「財団法人・日本捕鯨協会」が存在していた。しかし、ＩＷＣによる捕鯨規制の強化に対応して、日本捕鯨協会と鯨類研究所とが合併し、一

九七〇年代にさらにＩＷＣによる捕鯨の規制が強化されると、新体制に適応するために、それらの会社の捕鯨部が合同して、一九七六年に「日本共同捕鯨株式会社」が設立された。

そして、ＩＷＣによる商業捕鯨の一時中止の決定に対する異議の申し立てを日本が撤回して、一九八七年に日本共同捕鯨株式会社は解散し、それを母体として、日本鯨類研究所が実施する鯨類捕獲調査に必要な用船会社として、「共同船舶株式会社」が設立された。この会社は現在、中央区豊海町に事務所を持って、鯨類捕獲調査のための調査船を運行している。

財団法人・日本捕鯨協会は、日本共同捕鯨㈱の解散とともに、一旦は解散したが、その後任意団体として「日本捕鯨協会」が復活し、中央区豊海町に事務所を構えて、日本の捕鯨の再開を期して活動している。

クジラを扱う市場とクジラ料理を食べられる店

共同船舶㈱は、日本鯨類研究所の委託を受けて、鯨類捕獲調査において調査副産物として生産されたクジラ製品の販売を行っている。販売には公益枠と市販枠とがあり、公益枠として、捕鯨に関係している地方自治体、啓発、学校給食、病院食用に鯨肉が市価よりも安く売られている。一般枠としては、首都圏では、中央区築地の中央卸売市場にある荷受けが、拠点となっており、鯨肉加工メーカーにも、共同船舶㈱から直

接売られている。市場販売用の鯨肉は、卸売業者のＡ社とＢ社が扱っており、それから同じく中央卸売市場内にある、Ｃ社（図16）、Ｄ社、Ｅ社などの仲卸に渡る。加工メーカーの鯨製品もまた、荷受け、仲卸と流通する。スーパー、百貨店内専門店、飲食店は、築地市場内の仲卸の店から、または加工メーカーから直接に、そうした鯨肉や加工品を買う。図17に、以上述べた調査副産物の首都圏での流通経路を示す。二〇〇六年からは鯨肉の新たな販路を開拓する目的で、合資会社「鯨食ラボ」が加わった。

東京都内で、鯨肉を食品用として扱っている店は、都内にも多くある。その中で、御徒町駅近くの吉池本店の鮮魚部には、鯨製品の種類が多く並んでいる。また、鯨肉を扱うチェーン店として、「魚の北辰」、「Ａ―プライス」、「角上魚類㈱」の各店、などが上げられる。

クジラをメニューにしている老舗として、前述の「駒形どぜう」が、現在も駒形にあり、支店が渋谷にもある。クジラ専門の料理店としては、渋谷区道玄坂に「元祖くじら屋」がある。中央区晴海にある「ホテルマリナーズコート東京」でも、クジラ料理を楽しむことができる。「土佐料理　祢保希（ねぼけ）」は東京都内の銀座、渋谷、西新宿、などに支店があり、各店でくじら料理を出す。港区白金にある、「うずら」では、小さな店ながら、おいしいくじら料理が食べられる。浅草に「勇新」という、くじら製品の販売と、くじら料理を専門とする料理店があったが、残念ながら、二〇一〇年に閉店した。

クジラをメニューにしている老舗、「駒形どぜう」

図 16　築地市場内のクジラ専門仲卸店（山本徹氏写）。

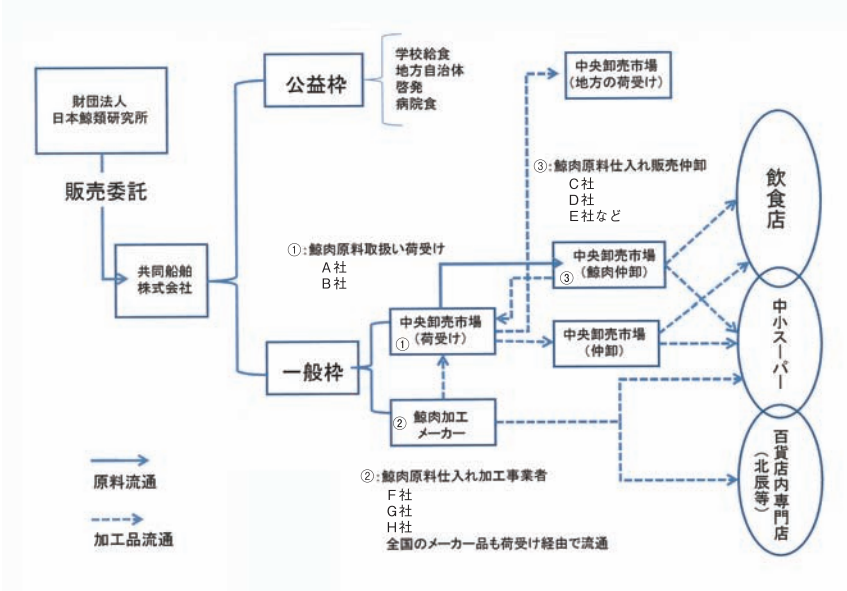

図 17　調査捕鯨副産物の首都圏での流通経路（中田博氏作成）。

クジラ料理を出す居酒屋は東京にも多い中で、新宿の歌舞伎町一丁目にある「樽一」では、クジラの内臓類を含めて、種々のクジラの部分の料理を味わうことができる。台東区浅草二丁目の居酒屋「捕鯨船」は、クジラの肴を出し、浅草芸人が集まる店として、店主の河野通夫氏の〝鯨（げい）を食って芸を磨け！〟の台詞とともに、古くから有名である。

「鯨ポータルサイト（http://www.e-kujira.or.jp/index.html）」の「美味しいクジラのページ」には、〝クジラの買える店〟、〝クジラが食べられる店〟、〝鯨料理を伝える会〟、〝デパート催事情報〟の欄があるので、参考にされたい。

クジラの記念碑、オブジェ

東京における、クジラに関係する記念碑として、港区海岸一丁目の竹芝埠頭公園の一角に、「マンハッタン号記念碑」がある。マンハッタン号は、米国の捕鯨船であり、操業中に救出した日本の漂流民二二人を救出して、ペリー艦隊よりも八年前の一八四五年に、浦賀に来航して、彼らを引き渡すことができた。その事件を記念して造られたのが、この碑である。

江戸時代の日本橋人形町には、人形浄瑠璃や歌舞伎を演じる芝居小屋が立ち並んでいた。そして、人形浄瑠璃に使う人形の頭に、セミクジラのくじらひげ板が使われていた。それに因んで、水面に頭を出したヒゲクジラのオブジェが、この町の一角に置

人形浄瑠璃に使う人形の頭に、セミクジラのくじらひげ板が使われていた

かれている（図18）。このオブジェは美的には良くできているが、その形がセミクジラでなく、ナガスクジラ属に近いのは、残念である。謂れは判らないが、それと全く同じ型のオブジェが、品川区大崎の小関公園内にも置かれている。

前述の、境内に鯨塚がある利田神社の隣の「鯨塚公園」には、クジラの遊具とともに、セミクジラのモニュメントがある。しかし、上顎の形がセミクジラと大分違っていて、シロナガスクジラに近いのが、筆者には反って面白かった。

新宿中央公園など、都内のいくつかの公園の一角には、コンクリート製の、実物大のミンククジラの遊具が置いてある（図19）。

「しながわ水族館」に隣接する品川区民公園には、「クジラの噴水」がある。この噴水は、寛政の鯨をモチーフにして作られたといわれ、二頭のクジラが子鯨を挟み、そこに船が近付く様子が描かれている。

また、江東区越中島公園にある越中島プールの隅田川に面した壁面は、見事なザトウクジラのモザイク画で飾られている（図20）。江東区によると、かつて越中島が海に面していた歴史や、公園入り口に錨のモニュメントが置かれていたり、すぐ近くに東京海洋大学海洋工学部（当時の東京商船大学）があることなどから、平成六（一九九四）年の同プールの改修に当たり、海をイメージした外壁で装飾することになったそうである。そのため、装飾を委託された作者は、江東区にある海の記憶・神話性を浮かび上がらせようとし、荒波と勇壮な鯨を描いたということである。

新宿中央公園など、都内のいくつかの公園の一角には、コンクリート製の、実物大のミンククジラの遊具が置いてある

図18　人形町の一角にある、クジラのオブジェ（山本徹氏写）。

図19　新宿中央公園内にある、ミンククジラの遊具（大隅清治写）。

図20　越中島プールの外壁（栗原修氏写）

文政年間（一八一八～三〇年）には、祭礼にクジラの山車が出たという、江東区富岡の富岡八幡宮は、境内で相撲興行が行われたほど、相撲に関係ある神社である。その境内に「巨人力士身長碑」があり、その石碑に、江戸時代の巨人力士の名が刻まれている。その中に「生月鯨太左衛門」の名がある。この力士は捕鯨が盛んであった、長崎県平戸市生月町の出身であり、四股名のように、身長が二m三〇cmもあったと、この石碑に刻まれている。

クジラに関係した墓

豊島区南池袋の雑司が谷霊園には、遭難して米国の捕鯨船に救出され、米国で学んだ後に、米国捕鯨船の船員として働き、帰国して、幕末の開国にも貢献した、ジョン万次郎の墓がある。

この他にも東京には、日本の捕鯨やクジラの仕事に関係した人物の墓が、多くあるに違いない。

あとがき

終わりに当って、「東京とクジラ」の将来について、筆者が希望することが二つある。そのひとつは、古川柳にも詠われていたように、誇るべき江戸の鯨食文化の伝統を、

次代に継承、発展して頂きたいことである。現在は東京で、〝米離れ〟と同様に、〝鯨離れ〟が進んでいるのは、嘆かわしい限りである。鯨肉は、自然に優しく、栄養が豊富で、優れた食材である。そして、食文化は、味わってこそ、継承できる。それには、すでにいくつかの県で実施しているように、東京でも、学校給食で鯨肉を食材として扱うことを早く復活して欲しい。

第二に、前述のように、東京ではホエールウォッチングが盛んであり、将来もこれが発展するであろうが、反捕鯨勢力は、〝ホエールウォッチングは捕鯨の代替である〟と宣伝し、それを信じている人がいる。しかし、それは全くの誤解であり、両者は二律背反するものでは決してない。アメリカ系コククジラの実例で明らかなように、ホエールウォッチングと捕鯨は両立して発展できるのである。東京の人も、ホエールウォッチングを楽しむと同時に、日本型の捕鯨を早く再開させて、自然の恵みを活用して、環境に優しい、持続的な海洋生物資源の利用を正しく理解し、支持して頂くことを切望する。

これまでに紹介した種々の事例から、東京とクジラとは、過去から現在に至るまで、種々の形で広く関係があることを、個々の事例について詳細に記述することはできなかったけれども、少しでも理解して頂いたのではあるまいか。

東京とクジラとの関係について、筆者の不勉強により、紹介し切れなかった事例が、種々の側面で、まだ沢山あると思われる。また、筆者の無理解により、誤った記述が

多くあるかもしれない。このテーマの内容を充実するために、それらについて、ご叱正とご教授を賜ることを、是非にお願いする。

末筆ながら、写真を提供して下さった、日本捕鯨協会の山本徹氏と、鯨肉の東京における流通の流れ図を作成して下さった、鯨食ラボの中田博氏に、深甚の謝意を表する。

参考文献（順不同）

①細田徹　一九九五A　勇魚雑録―検証・寛政のクジラ―。勇魚三。
②細田徹　一九九五B　鯨に関する展覧会出品目録。勇魚四。
③金城英雄　一九八三　房総の捕鯨。倫書房。
④小松正之　二〇〇四　江戸東京湾くじらと散歩。ごま書房。
⑤永山久夫　一九七六　たべもの江戸史。
⑥日本鯨類研究所　二〇〇三　江戸東京湾くじらマップ。
⑦日本鯨類研究所　二〇〇四～二〇一〇　ストランディングレコード。
⑧小笠原ホエールウォッチング協会　メガプテラ。
⑨興津要　一九九五　江戸食べもの誌。朝日文庫。
⑩大隅清治　二〇〇三　クジラと日本人。岩波新書八三五。
⑪大隅清治（監修）笠松富士夫・宮下富夫・吉岡基（著）本山賢司（イラスト）二〇〇九　新版鯨とイルカのフィールドガイド。東京大学出版会。
⑫桜井美代子　一九九九　幕末から明治期における食生活の一考察―主婦の日記を中心に―。東京家政学院大学紀要第三九号。
⑬作見陽一　一九九六　大江戸の天下祭り。河出書房新社。
⑭田中弘之　一九九七　幕末の小笠原　欧米の捕鯨船で栄えた緑の島。中公新書一三八。
⑮竹内賢士　一九九九　明治の水産博覧会（鯨・海獣資料）。捕鯨船二六。